

しはつやま

かさぬひ

こかく

たなしおぶね

四極山打ち越え見れば笠縫の島漕ぎ隠る棚無小舟

「住吉の浜の磯（石ころ）の果てるるところ（四極）から小高い丘を上り切ると難波潟に昔から笠縫の人々が住んでいる島が見えその島影に棚板のない小舟が隠れていくよ」

たけちのくろひと

たかいち

碑の和歌の作者は万葉歌人高市黒人です。生没年月は不詳。大和国高市郡の出身。持統天皇の吉野行幸や三河行幸に隨身し歌を詠んだ。又越中、尾張、近江、山城、攝津を旅し歌を作る。

かものまぶち

にしなり

もとおりのりなが

「四極山」は、国学者賀茂真淵は、摂津国西生郡にあると述べられ、又国学者本居宣長も住吉の山坂神社辺りが四極山だと書いている。住吉津から大和の竜田に通ずる磯齒津路があり、その途中住吉より喜連に行く間の小高い丘が四極山と言われ、ここから河内湖の笠縫島を眺めて詠んだと推測されます。

「笠縫の島」については、本居宣長は、古事記伝の中で「摂津国の笠縫の島という所は東生郡の深江村である」と述べている。この深江村に（宮浦・水鶏田・菅島・島ノ岸）という字名があり、これが島であった事を推測させる。

やまと

かさぬいむら

約二千年前、大倭に在った笠縫邑で、現在は伊勢神宮に祀られている御神体を護りながら、菅で笠、その他神事に使用される祭具等を作っていた。そして第十一代垂仁天皇の御代に御神体が伊勢に遷幸された後、祭具の需要は減ったが、菅笠が高貴な人々のためだけでなく、一般の人でも使用し始め需要が増えたので、菅草の豊富な場所を求め生駒の山並みを越えた。そこで小さな島の辺りに良質の菅が豊かに生えているのを見つけここを安住の地と定めた（深江村）。そして時代が進み、経済文化が発展するに伴い菅笠の需要がますます多くなり、中世には奈良興福寺の大乗院が支配した「座」四十八の中に「菅笠座」があり畿内の菅笠を独占していた。江戸時代にお伊勢詣りが全国的に盛んになり暗峠越奈良街道を通る人が、月間四、五万人があったと言われている。街道沿いには数軒の菅笠屋があり人々は旅の安全を祈って菅笠を買い求め参詣したといわれている。伊勢音頭の中にも歌われ摂津名所図会にもその賑わいが描かれている。

しかし、なによりも重要なことは、平安時代の法令集「延喜式」にも「摂津国笠縫氏に調達」とあるように、神宮式年遷宮の当初から「御笠」及び「御翳」を奉納されていたと考えられる。この「深江菅細工」の伝承が平成十一年に大阪市指定無形文化財に認定されています。また人間国宝の角谷一圭氏の下でも、昭和四十八年以降代々御神鏡を謹作されています。

かんがい

そして天皇の御即位に際し侍従が後方からご身体に差し掛け、汚れから守る御菅蓋（菅笠）を献納できる栄誉を代々担っているのが東生深江笠縫の島であります。

深江歴史文化委員会

平成二十五年十一月三日